

特別展 「逝きし世の祇園祭の神々」

図録及び解説

日本随一の祭礼「祇園祭」は、日本人だけではなく、世界遺産（ユネスコ無形文化遺産）として世界にも名を知られています。

しかし、祇園祭で祭られる「祇園の神々」のすがたを、図像として目にする機会は、現在ではほとんどありません。

特に、祇園祭の主祭神である「牛頭天王」の神像は、博物館等で展示されることは全国的にも例が少なく、京都でも京都府立山城郷土資料館の牛頭天王像のみと思われ、ほとんど目にする機会がありません。

また、かつては「歳神（としがみ）」として身近な存在でもあった、祇園祭の女神「頗梨采女（はりさいにょ）」や、牛頭天王と頗梨采女の御子神である陰陽道の神々、「八王子」も、いまでも祇園祭の神輿にて渡御される神々ですが、その姿を目にすることも少なくなりました。

このたびの特別展は、いまでは希少となった、近代化以前の祇園祭の神々の「すがた」を目にすることで、視覚的に、かつての日本人が思い描いていた祇園祭の神々への信仰に近づこうとするところみです。

この特別展にてご覧いただきました図像の多くは、「祇園信仰研究会」のホームページからもご覧いただけますので、あわせてご利用ください。

〈祇園信仰研究会のホームページ〉

<https://www.gion-shinkou.com/>

〈QR コードは下記〉



源鳳院および山科家について



山科家は藤原北家の流れで、平安時代末期～鎌倉時代初期の公卿藤原実教(1150～1227)を初代として始まりました。

後白河法皇より山科新御所とその周辺を所領として賜り、以後代々傳承し、家名の由来となります。山科家の人々は宮中で大納言・中納言・参議等の要職についた他、南北朝期以降は内蔵頭・御厨子所別当を世襲し朝廷財政を運営します。

また、公家の家職として、装束の調進と着装をする衣紋道山科流並びに雅楽の笙を伝えるなど、有識故実をもって歴代天皇の側近として仕えました。

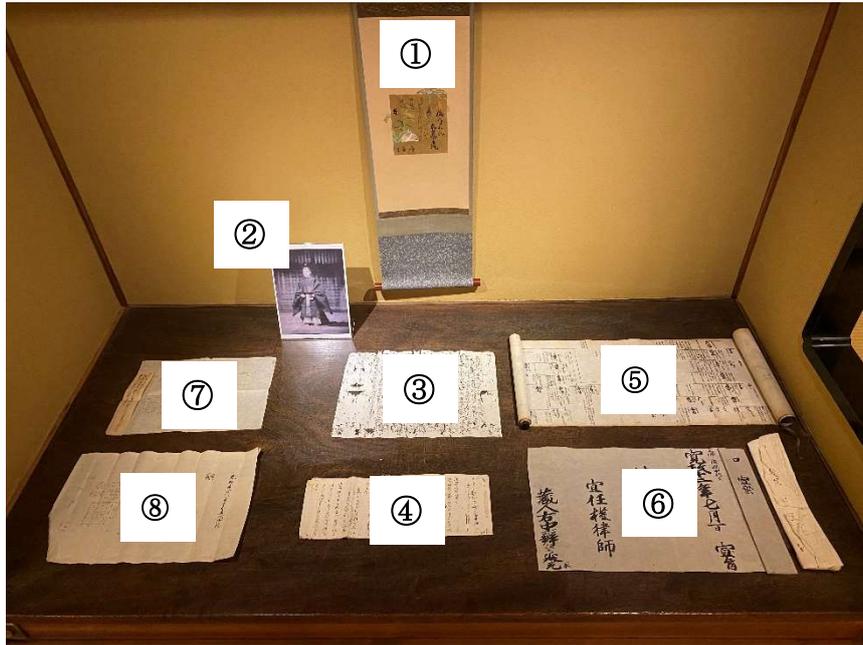
山科家は歴代当主による日記が多く伝存していることで著名であり、中でも13代言継(1507～1579)の日記「言継卿記」は戦国時代研究の重要史料として評価されています。

山科伯爵家の旧邸宅跡である源鳳院は、山科言綏（ときまさ）伯爵により1920年に建築され、ちょうど100年になります。

庭園は、近代日本庭園の先駆者とされる作庭家、七代小川治兵衛の手によるものです。



公家・山科家と祇園執行家・宝寿院家ゆかりの品々



①山科言繩卿 和歌色紙／②山科言繩卿 勅使装束姿／③山科言繩卿 祇園臨時祭宣命文／④冷泉為理卿 祇園臨時祭 手記（江戸時代後期）

「勅祭」としての祇園祭である「祇園臨時祭」（ぎおんりんじのみまつり）は、平安時代、白河法皇の御願で始まり、祇園祭において重要な祭礼であったが応仁の乱で中絶した。慶応元年に祇園臨時祭は復興し、その数百年ぶりに祇園社に参向した勅使こそ、若き公家で四位少将であった山科言繩卿である。①はそのころの言繩卿の和歌、②は言繩卿の勅使装束姿（明治初期か）、③は復興された祇園臨時祭で言繩卿が読み上げた勅使宣命、④は、山科家と永年の友誼があった冷泉家の当主、冷泉為理卿が、言繩卿のつきそいで祇園社臨時祭に参加した手記であり、数百年ぶりの臨時祭再興への深い感慨が記されている。いずれも山科家蔵。

⑤宝寿院家（建内家）伝来 祇園執行系図（鎌倉時代～南北朝時代）

平安時代中期、永保元年（1081年）、公卿・紀長谷雄の子孫、行円が初代の祇園執行（祇園社の現地長官）となった。以後、行円の子孫が祇園執行を世襲した。室町時代初期には「宝寿院」の院号を称する一族が延暦寺支配からの独立を果たし、強勢を誇る。この系図は鎌倉時代から南北朝時代に作成されたと思われる祇園執行系図であり、宝寿院家（現・建内家）に伝来し、平安時代以来の祇園執行家の詳細を伝えるきわめて貴重な史料。建内家蔵。

⑥宝寿院家（建内家）伝来 僧官宣旨案（江戸時代）

祇園社の現地の神官の長であった宝寿院は、神官でありながら僧侶でもあり、代々、朝廷から、僧侶の位階である僧位僧官を受け殿上人の資格を得ていた。この「口宣案」は祇園執行・宝寿院賢円を権律師という僧官に叙するもの。天皇の命令（口宣）を、蔵人が書き、これを上卿（ここでは公家・広橋家）宛てている。紙は、このように薄墨色の紙（宿紙）が使用されることが宮中の慣例である。建内家蔵。

⑦宝寿院家 見取り図（四条通の邸宅）／⑧宝寿院家 見取り図（円山公園の邸宅）（江戸時代）

江戸時代の宝寿院家は、おおむね現在の八坂神社西門前、いまの一力亭のあたりにあったが、江戸後期に、今の円山公園に移転した。その屋敷は、この見取り図に描かれるように、広大なものであった。建内家蔵。

さまざまな牛頭天王像

祇園祭の主祭神である「祇園牛頭天王」(素戔鳴尊)の神像は、今では実物を目にする機会が皆無とってよく、祇園祭の担い手である人々も、そのほとんどが実物を見たことがない。本展示では江戸期以前の希少な牛頭天王像を四体展示し、「祇園祭の神」の姿に迫る。

牛頭天王泥仏

牛頭天王の泥仏。実物は 500 円硬貨程度の大きさしかない非常に小さい像である。このような小像ながら、明王形・炎髪・牛頭・斧・羂索という中世以降に定式化された牛頭天王の像容の特徴を備えており、牛頭天王と特定できる。



牛頭天王坐像

像高 20 cm 程度の寄木造による小像。小さいながら、玉眼が施されている。制作年代は不詳だが、中世以降の、明王形、斧、羂索という典型的な牛頭天王の像容を示している。



牛頭天王坐像

像高 25 cm 程度の一木造による小像。彩色及び文様が一部残っており、もとは肌が赤く彩色されていた名残がある。制作年代は不詳だが、中世以降の、明王形、斧、羂索という典型的な牛頭天王の像容を示している。



牛頭天王坐像

像高 40 cm 程度の寄木造による牛頭天王像。玉眼。制作年代は不詳だが、中世以降の、明王形、羂索という典型的な牛頭天王の像容を示している。持物は失われているが、斧であった見て大過ない。全体が赤く彩色されているのも中世以降の牛頭天王像の特徴である。現存する牛頭天王像はしばしば牛頭部分の耳と角が経年により脱落するが、本像は完全な形で牛頭が現存している。



牛頭天王立像

神将形の牛頭天王の立像。一木造。像高 90cm 程度。牛頭部分の耳と角は脱落していたが、それぞれ耳と角に対応する制作当時の穴が残存していたため、古材により近時追補した。製作年代は不詳だが、中世後期からの牛頭天王像が、ほぼ、明王形、座像、持物が斧・羂索という様式によって製作されているのに対し、本像は、神将形であり、持物が斧ではないという点において、平安期の牛頭天王の様式を有している。



描かれた牛頭天王のすがた

←牛頭天王図

江戸期のものと思われる牛頭天王図。形式は中世以降の牛頭天王の一般的な形式に忠実である（明王形、牛頭、炎髪、持物に斧、羂索）。しかし、三眼である点はめずらしい。細部まで詳細に躍動感をもって書き込まれており、現存する牛頭天王図として非常に優れた図像である。



←祇園神曼荼羅

祇園の三神（牛頭天王・頗梨采女・八王子）を一つの軸に記載した神像軸。白黒の版画に着色したものと思われ、同じものは多数制作されている。牛頭天王の姿は牛頭・炎髪・斧・羂索・半跏踏下坐という典型的な像容であり、陰陽道の教典である「金烏玉兔集」に記述される斧・羂索・憤怒・牛面という像容に沿っている。牛頭天王の妃である頗梨采女とその子である八王子もそれぞれ典型的な像容である。



この図の特徴は、向かって中心に牛頭天王、右に八王子、左に頗梨采女を配置していることであり、これは江戸時代の祇園社の本陣の配置に合致する（ただし、明治以降は東西が逆となっている）。したがって、本図は祇園社の信仰形態を図像化した、**祇園社曼荼羅**であるといえる。

←虚空蔵牛頭天王頗梨采女曼荼羅

中央に虚空蔵菩薩を配し、両側に牛頭天王・頗梨采女を配する、他に類例の無い曼荼羅。

なぜ中央が虚空蔵菩薩なのかは不明だが、八王子の本地物を虚空蔵とする説もある（ただし、祇園社においては一般的には文殊菩薩とされている）。

そのため、八王子の本地仏を、特に崇敬する趣旨で作画された可能性も一応は考えられる。本図自体は江戸期のものと思われるが、ここに描かれる牛頭天王は、神将形・三面であり、様式としては平安期以来の古い形式である。



祇園の女神—頗梨采女と歳徳神

今日では忘れられがちだが、牛頭天王の妻、**頗梨采女**（はりさいにょ）は、陰陽道（曆道）の福神である**歳徳神**として、牛頭天王に劣らぬ崇敬を受け、**少将井天王**とも呼ばれた。頗梨采女又は歳徳神が単像として描かれた遺物が、過ぎし日の女神への信仰を物語っている。現在の「東御座」の神輿に坐すのは、この女神である。



頗梨采女図

本図は牛頭天王の後である**頗梨采女**（はりさいにょ）の一尊だけを掛軸に描いたものである。頗梨采女は**歳徳神**や**奇稻田姫**と同一視される女神であり、祇園社においては**少将井天王**とも呼ばれた。本図の裏書に、「奉造復頗利采女御影是レ歳徳神ト名ク」と記載されており、**頗梨采女=歳徳神**として描かれた神像図であることが判明する。祇園の女神である頗梨采女は祇園信仰において牛頭天王とは別個独立した崇敬対象でもあった。その一例として、中世の祇園祭においては**少将井天王頗梨采女の神輿は牛頭天王・八王子とは別個の御旅所である少将井御旅所に渡御していたのである**。本図は**頗梨采女が牛頭天王・スサノヲとは独立した崇敬対象であったこと**の、ひとつの実例といえる。



歳徳神図

江戸時代の絵師、**狩野了承**による**歳徳神**図。歳徳神とは元旦の福神である「歳神」（としがみ）の一種である。歳徳神は「**恵方神**」としての性格もあり、年ごとにこの神の坐す方角が変わり、それによって恵方も毎年変わる。**節分の丸かぶり寿司（いわゆる恵方巻）はこの神の坐す方角に向かって食する**。歳徳神は牛頭天王の妃神である**頗梨采女と不可分一体**といえるほどに習合し、祇園信仰における**曆道（陰陽道）において中心な地位を有していた**。本図の裏書きにおいて「**歳徳 恵方神**」と記載されていることから歳徳神と特定できる。

陰陽道と祇園信仰

牛頭天王・頗梨采女・八王子は、民間の陰陽道の神としても崇敬されていた。



←歳徳神八将神曆道図

本図は方位神である歳徳神と八将神の典型的な図像に、各神に対応する方位を記載しているものであり祇園信仰と陰陽道（曆道）の密接な関連を示している。右上の説明書には「曆家書曰歳徳神頗梨采女乃天道神之配八将神之母也」とあり、中心の女神を祇園神である「頗梨采女」と明記している。また、ここで描かれる八将神は祇園神である八王子でもある。

この図に象徴されるように、祇園信仰と陰陽道とは密接に習合していた。

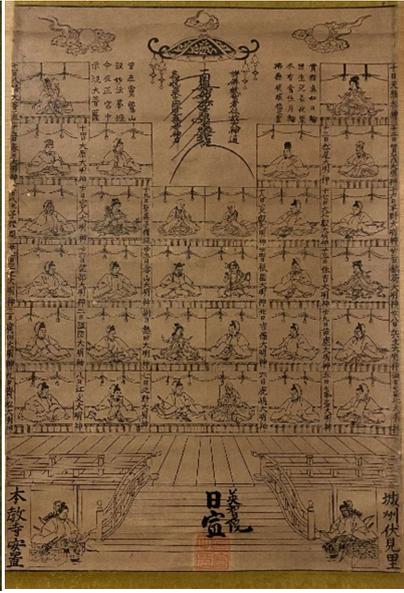


歳徳神八将神図→

典型的な歳徳神と八将神の図。前面に鏡餅が描かれているのは元旦の神（歳神）としての歳徳神の性質を示す。両肩に日月が描かれているのも歳徳神として典型的な像容である。牛頭天王の姿は一切描かれておらず、頗梨采女と八王子が歳徳神・八将神として独自の崇敬対象であったことを示唆する。

三十番神に描かれる「異形の神」としての牛頭天王

日蓮宗の作成する「三十番神」の図においては、法華經の守護神として、三十柱の日本の神祇が描かれる。この中で、男神はほとんどが衣冠束帯姿で区別がつかないが、「祇園大明神」だけは牛頭天王として、他の神々と明らかに区別できる姿で描かれることが多い。これは「祇園神」が日本のあまたある神祇の中でも突出して個性的な「異形の神」であったことを物語るものといえる。



牛頭天王と素戔鳴尊の習合

← 祇園牛頭天王荒魂図

本図は「祇園牛頭天王」と記され、牛頭を頭上に頂いた神像である。しかし、像容はスサノヲ型の古代神であり、さらに右端に八雲神詠（古事記においてスサノヲが詠んだ和歌）があり、左には「速素佐男大神」とあるなど、「牛頭天王」と「スサノヲ」が同居した習合図である。さらに、「五黄土星寅之本命最大王神」とあり陰陽道（曆道）とのつながりも見られ、八雲神詠の左下に陰陽道と関わり深い「セーランドーマン」の九字紋が記されている。このように、本図には祇園牛頭天王・スサノヲ・陰陽道、といった多要素が描かれ、祇園信仰の「習合信仰」（シンクレティズム）としての特徴が顕著にあらわれている。



← 牛頭天王大蛇退治図

本図は一見すると典型的なスサノヲによる八岐大蛇退治図のように見える。しかし、スサノヲの頭部には明らかに「牛頭」があり、本図は「牛頭天王」であるスサノヲとして描かれていることが分かる。古代神のスサノヲと牛頭天王のイメージが交錯する図像である。



素戔鳴尊
牛頭天王
疫神除之神

← 素戔鳴尊牛頭天王図

素戔鳴尊と牛頭天王の神号を併記した神像軸である。像容は素戔鳴尊であり、牛頭は冠していない。「疫神除之神」とあるように防疫神としての祇園信仰に直結している。

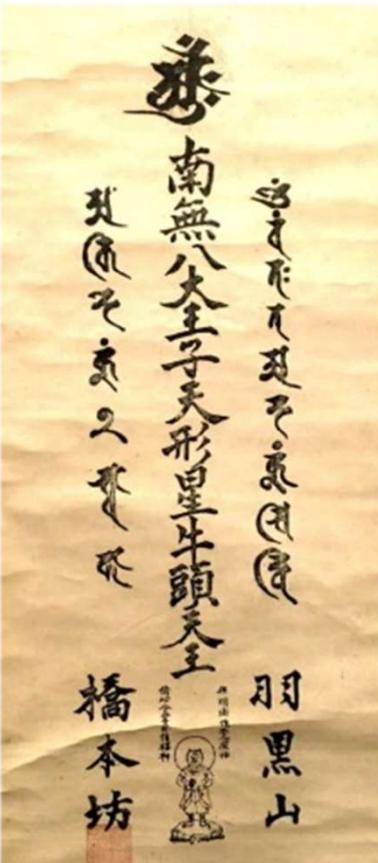


牛頭天王と素戔嗚尊の神学的習合関係

牛頭天王と素戔嗚尊の習合関係は、単なる「同一視」や「混同」にとどまらず、その神としての属性についても及んでいた。以下、ふたつの掛け軸の記載を手掛かりにその神学的習合関係を探る。



←津島牛頭天王神号軸 尾張を中心に多くの信仰をあつめた「津島牛頭天王社」の江戸時代の神号軸（「彌五郎殿」「居森殿」は津島社の摂社）。注目すべきは、牛頭天王の神号の下に「一詠八雲和歌シテ心清々立」とあり、スサノヲの八雲神詠が本軸の中心となっていることである。すなわち「津島牛頭天王」と「スサノヲ」は完全に同一体とされている。さらに重要なのは、続いて「萬民此ニ習テ祓禊ノ法ヲ務」とあり、「蒼生ノ居家ハ則神ノ舎ナリ 蒼生ノ器物ハ則神ノ器ナリ 是ヲ清浄則除疫病痘疹ノ災」とあることである。すなわち、八雲神詠と「吾心清清之」（我が心清々し）というスサノヲの「祓い清める力」によって居宅や器物を清浄にすることで疫病や災いを防ぐという思想が示されているのである。神道教説においては、例えば江戸時代の吉川神道や垂加神道において、高天原で暴虐を尽くし天津罪をおかした悪神であるスサノヲが追放先において八岐大蛇を退治し神剣を天照大神に奉じるといふ善行をなし、八雲神詠と「吾心清清之」とを唱えたことにより自ら罪を祓い清めて善神に転じたとする解釈があった。つまり本図は、巨旦将来を殺戮したり八岐大蛇を倒すといった暴力によって疫神を打ち倒すという牛頭天王・スサノヲのありかたとは異なり、「吾心清清之」というスサノヲの祓い清める力こそが、疫病を鎮める防疫神としての牛頭天王の力の源泉であるとしているのである。スサノヲの神道教説が牛頭天王信仰に取り入れられた実例といえる。

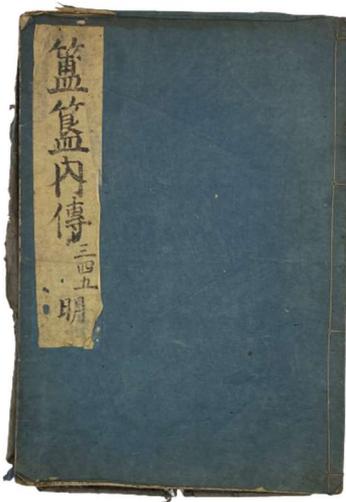


←羽黒山牛頭天王掛軸 修験道の聖地、羽黒山の橋本坊が多数発行していた八王子・点刑星・牛頭天王の掛軸。天刑星とは牛頭天王と習合していた疫除神。本図の牛頭天王像は牛頭はなく頭に角がある鬼または神農のような外見をしている。牛頭天王の両脇には「無明法性不二疫神 信心合掌亦復福神」とある。これは仏教にいう「無明即法性」すなわち無明（迷い）と法性（さとり）は一体不二であるという原理である。

重要なことは、この「無明即法性」という性質こそ、中世の神道家がスサノヲの本質として説いていた点にある。たとえば吉田兼俱はスサノヲの善悪二面性を「善悪不二」（善悪一体）の理をしめすものであるとした。兼俱の子、清原宣賢もスサノヲは「無明法性無隔也」と述べているほか、多くの神道家がスサノヲの本質は「無明即法性」であると説いている。本図はこれをうけて牛頭天王のもつ「疫神」と「福神」の二面性は一体不二としているものと考えられ、牛頭天王信仰にスサノヲの神道教説が取り入れられた一つの実例としてみることができる。

以上のように、牛頭天王と素戔嗚尊の習合関係は、単なる「同一視」や「混同」にとどまらず、その神としての属性についても及んでいたことが、これらの遺物から看取することができるのである。

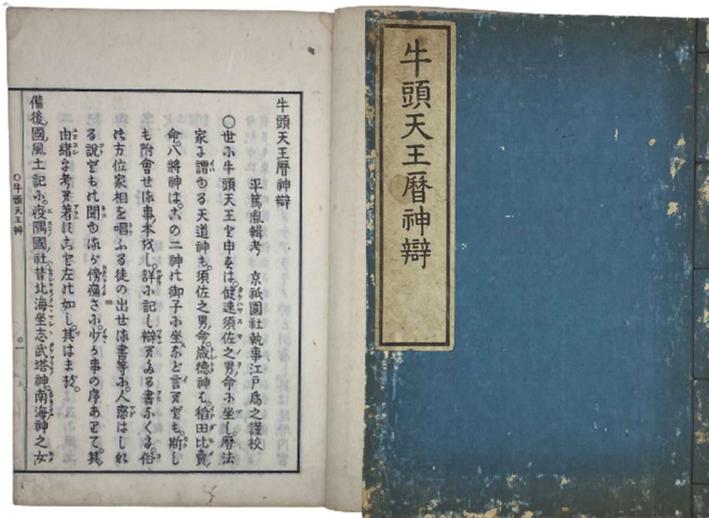
牛頭天王にまつわる書籍



さんごくそうでんおんようかんかつほきないでんきんうぎよくとしゅう
三国相伝陰陽館轄篋篋内伝金烏玉兔集

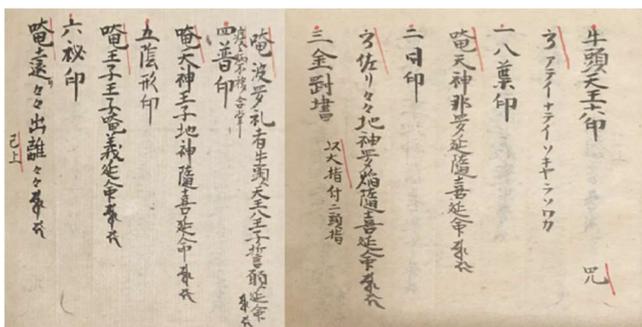
通称、「**金烏玉兔集**」または「**篋篋内伝**」とよばれる、陰陽道の専門書。第1巻において、祇園神である牛頭天王・頗梨采女・八王子の縁起と、様々な方位神とその吉凶を説明しており、祇園社家が制作に携わったともいわれる。

この書が、一般庶民における陰陽道の重要なテキストとなったため、祇園信仰は陰陽道と密接な関係を有するに至った。明治以降は陰陽道に廃止命令が下され、祇園信仰と陰陽道との関係は一度は絶たれた。展示はいずれも1600年代前半の古い版本。



ごすてんのうれきしんべん
牛頭天王曆神弁

復古神道の大成者、**平田篤胤**の著書。文政8年(1825)。復古神道の観点から、「牛頭天王」と「素戔鳴尊」の習合を批判した。この書が、牛頭天王の神号廃止を加速させることになる。注目すべきは、「京祇園社執事江戸為之謹校」とあり、祇園社の承仕役人であった江戸為之が名を連ねていることである。江戸為之は祇園執行宝寿院の家来のような位置づけであり、彼が公式に「牛頭天王」と「素戔鳴尊」の習合を批判していることから、江戸後期の祇園社においては、「牛頭天王」と「素戔鳴尊」の習合が誤りであるとの考えが主流となっていたと考えられる。



ごすてんのうろくいんぽう
牛頭天王六印法

密教と習合した神道、「御流神道」や修験道においては「牛頭天王六印法」という祈祷法がもちいられた。展示は江戸後期(天保年間)に書かれた牛頭天王六印法である。牛頭天王よりも八王子(王子)の名が多くあらわれる点に、独自の八王子信仰の片鱗がみられる。

祇園社・八坂神社の護符に見る神仏分離



感神院牛王法印

「感神院」とは、平安時代から使用されている、祇園社の別名であるが、神仏分離によって廃された。

右は、「牛王法印」と呼ばれる護符であり、少なくとも鎌倉期から祇園社において人々に配布されてきた護符である。

これには「祇園牛頭天王守護所」との札が付属しており、この札を祀る家は、牛頭天王の守護するところとしている。



八坂神社護符

明治元年ころ、八坂神社の正社官、實光井頭成が発行していた護符。神仏分離令においては「祇園社」は「八坂神社」と改名されるが、同様に「感神院」の号を廃止し、また、「祇園牛頭天王守護所」とあった縦長の札も、「八坂社 大神守護所」と置き換えられており、神社の名称と祭神の名称が、神仏分離令直後にすみやかに置き換えられたことが分かる。



(参考)「生土」牛王法印

上記とは別の例として、江戸時代の牛王法印の「牛王」をつなげ、「生土」としたもの。

祇園神は氏子地域の産土神であるという位置づけを表している。

えがかれた神仏習合時代の祇園社

東山遊楽図屏風



上は、祇園社を大きく描いた屏風絵。薬師堂のほか、いくつかの重要な建物が省略されているが、神仏分離の際に取り払われた「祇園精舎の鐘」が本堂裏に描かれているほか、仏塔である「祇園大塔」も描かれている。景観年代は1700年代後半。下の屏風も祇園社において描かれる建物などはほぼ同じであるが、景観年代は古く、寛永年間（1620年ころ）と思われる。いま、石鳥居となっている南門前の鳥居が木の鳥居として描かれていること、人々の風俗、清水寺の様子がその年代特定の根拠となる。八坂神社南門前に今も一軒だけ残る「二軒茶屋」において、「祇園豆腐」が供されている姿が描かれており、西門前には茶立女をみられる女性が客引きをしている姿が描かれるなど、風俗絵としても興味深い。



東山遊楽図屏風

本屏風はかなり損傷しているが、神仏習合時代の祇園社のすがたをよく活写している。現在の本堂の西側（図では本堂の下側）に、祇園神の「本地仏」（神の本体としての仏）である薬師如来を祀った**薬師堂**が描かれている。ここで祀られていた薬師如来は神仏分離時に他所に移された。「祇園精舎の鐘」ともいわれる「鐘」も描かれており、この鐘もまた、神仏分離時に除去され、他所に移された。また、本殿の脇において、参拝者を接遇する**僧侶**のすがたもみられる。このように、神社である祇園社には、仏を祀る仏堂があり、仏教的な施設である仏塔、鐘楼が供えられ、ときに僧侶のすがたをした社人が参拝者を接遇していたのである。（なお、僧侶がいる場所は、延暦寺中興の祖、「元三太師」を祀る場所であり、接遇する僧侶は「本願」と呼ばれた人々である可能性が高い。）



祇園社家による牛頭天王神号軸

いまでも祇園祭のときには、山鉾町において、「牛頭天王」の神号軸が掲げられる。



祇園牛頭天王神号軸

「牛頭天王」の神号軸は、祇園祭において、山鉾町の会所にて祀られる。

左は、祇園社の旧社家である「**實光院**」（紀頭道）の手によるもの。安政の疫病流行の際、十文字町に授けたものと箱書きにある。右は、祇園社旧神官家である「**祇園三院五坊**」のひとつ、「**東梅坊**」の手による、「**南無祇園牛頭天王**」の神号軸。いずれも表具に、祇園社の神紋が表されている。いずれも江戸時代末期のもの。神号自体、祇園社の御神霊を分霊した、御神体そのものであり、疫病除けの靈験があるものとされた。

現代によみがえる牛頭天王

八坂神社に協賛し祇園祭の遂行の任に当たっている氏子組織「清々講社」の幹事長である今西知夫氏（和菓子屋 鍵善良房 会長）が仏師に依頼して作成された牛頭天王像と香炉（特別に拝借し、展示）。背景の神号軸も現在の大徳寺黄梅院の和尚の手によるもの。

明治になって政府の命令によって事実上、禁じられたかたちになった「牛頭天王」信仰であるが、神仏分離令から150年以上の時を経て今もなお、祇園祭を行うひとびとによって守られつづけている。

